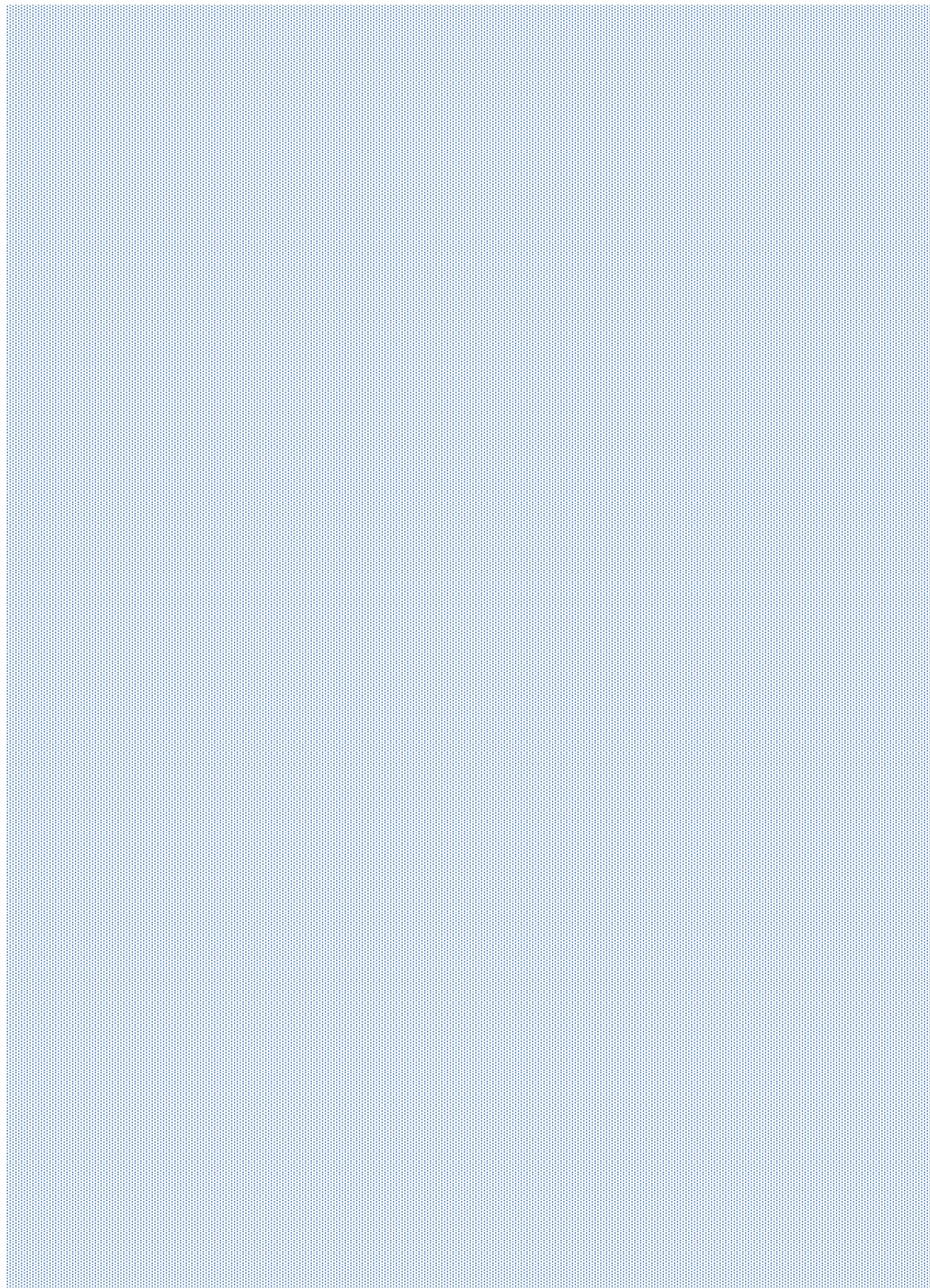


令和4年度 ^{すいせん}推薦に基づく入学者選抜
小論文

^{ちゅういじこう}注意事項

1. 問題は設問Ⅰから設問Ⅲまでで、2ページにわたって印刷してあります。
2. 検査時間は50分で、終わりは12時30分です。
3. 声に出して読むではいけません。
4. 文章はすべて記述用紙に明確に記入し、記述用紙だけを提出しなさい。
5. 文章を直すときは、きれいに消してから書きなさい。
6. 受検番号は記述用紙の決められた欄^{らん}に記入しなさい。
7. 記述用紙について
 - (1) 縦書きで書きなさい。
 - (2) 必要に応じて、段落を作ってもよい。作る場合は空白を1マスとして数える。
8. 問題の内容についての質問には一切応じません。



(余白)

1965 年（昭和 40 年）には 73 % だった日本の食料自給率は、2019 年（令和元年）には 38 % まで下がっている。資料 1 ～ 3 に関する設問に答えなさい。

資料 1. 「国民 1 人・1 日当たり供給熱量（消費カロリー）」と「PFC 熱量比率※」

	1965 年	2019 年
熱量	2458.7 kcal	2438.0 kcal
Protein（たんぱく質）：主に肉類、卵類、豆類など	12.2 %	13.0 %
Fat（脂肪）：主に油脂類、肉類など	16.2 %	30.3 %
Carbohydrate（炭水化物）：主に米類、砂糖類など	71.6 %	56.6 %

※ 人が 1 日あたりに必要な熱量のうち、三大栄養素のしめる割合

資料 2. 「品目別自給率」と「国民 1 人 1 年あたり消費量の変化」

	品目別自給率		国民 1 人 1 年あたり消費量の変化	
	1965 年	2019 年	1965 年	2019 年
米	95 %	97 %	111.7 kg	53.0 kg
小麦	28 %	16 %	29.0 kg	32.3 kg
肉類	90 %	52 %	9.2 kg	33.5 kg
鶏卵	100 %	96 %	11.3 kg	17.5 kg
牛乳・乳製品	86 %	59 %	37.5 kg	95.4 kg
野菜	100 %	79 %	108.1 kg	90.0 kg
果実	90 %	38 %	28.5 kg	34.2 kg
大豆	11 %	6 %	4.7 kg	6.7 kg
砂糖類	31 %	34 %	18.7 kg	17.9 kg
油脂類	31 %	13 %	6.3 kg	14.4 kg

（出典）：資料 1・2 とともに、農林水産省「食料需給表」（令和元年度）

設問Ⅰ. 資料 1・2 について述べたア～オで、正しいものには○を、誤っているものには×をそれぞれ解答欄に記入しなさい。

- ア. 国民 1 人、1 日あたりの供給熱量は増加している。
- イ. 1965 年には自給率が 85 % を超える品目が 6 種類あったが、2019 年には 2 種類に留まっている。
- ウ. 1965 年の野菜の 1 人、1 日あたりの消費量は 1 kg 以上となる。
- エ. 消費量が増加している品目の自給率はすべて減少している。
- オ. 消費量が減少している品目の自給率はすべて増加しているわけではない。

設問Ⅱ. 資料 1・2 をもとに、数値の変化が大きいものに着目して、日本の食生活の変化と食料自給率との関係性を、150 字以内で述べなさい。

資料 3.

日本では食料自給率が低下しているが、その一方で大量の食料を^{はいき}廃棄する「食品ロス」も大きな問題になっている。年間 2,531 万トンの食品廃棄物等が出されており、このうち、まだ食べられるのに廃棄される食品、いわゆる「食品ロス」は 600 万トンある。(数値は農林水産省及び環境省「平成 30 年度推計」による) 以下は「食品ロス」対策として、実施されている取り組みの例である。

例 1 「フードドライブ」

家庭で余った食品を持ち寄り、福祉活動に活用する「フードドライブ」が、E 県内で広がっている。食品を集める常設のコーナーは、4 月にスーパーの 3 店舗^{てんぽ}に設置されて以来、E 県内 16 カ所に拡大している。

集まった食品は、子ども食堂や福祉施設などを通じて、食料支援^{しえん}が必要な人のために活用される。

フードドライブで募^{つの}っているのは、「①未開封 ②賞味期限が 1 カ月以上残っている ③常温保存できる」といった条件をクリアした、米や缶詰・瓶詰^{かんづめびんづめ}、乾物や菓子類^{かし}、レトルト食品、調味料など。

県とともにフードドライブ事業を進める NPO 法人によると、スーパー 6 店舗で 4～9 月、約 2 トンの食品が集まった。

フードドライブの目的は、家庭内での食品ロスの削減。昨年度の食品ロスは E 県内で推計 5 万トンで、このうち約 3 万トンが家庭から出たとみられる。

例 2 「親切的な冷蔵庫」

総菜店を営む H さんは、ネットニュースで、生活困窮^{こんきゆう}者らに無料で食料を提供する「公共冷蔵庫」の取り組みが、海外で広がっていることを知った。「総菜店で余った食料を、困った人へ無料で提供できないか。フードロスの削減にもつながる」と考え、スーパーから冷蔵庫^{ゆず}を 1 台譲り受けた。「親切的な冷蔵庫」と名付け、総菜店で売れ残った食品を、ショッピング街の入り口に置いた冷蔵庫から、誰^{だれ}でも無料で持ち帰ることができる取り組みを始めた。

午後 2 時に総菜店が閉まった後、1 パックあたり 500 グラムほどの売れ残った総菜をパックに詰めて、午後 3 時ごろに冷蔵庫に入れる。平均して 1 日あたり 10 パック前後を入れているが、夕方にはすべてなくなるといふ。

設問Ⅲ. 資料 3 にある「フードドライブ」または「親切的な冷蔵庫」のいずれかをあなたが運営し、取り組みを広げていくうえで課題となることは何かを考え、課題と、課題の解決策を 400 字以内で述べなさい。

(余白)



